

エジプト学研究第 25 号 2019 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.25, 2019

目次

〈調査報告〉

エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 25 次調査— …………… 吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎野々花・有村元春 ……	3
第 11 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報 …………… 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・米山由夏 ……	25
2018 年 太陽の船プロジェクト 活動報告 …………… 黒河内宏昌・吉村作治 ……	44

The Journal of Egyptian Studies Vol.25, 2019

CONTENTS

Field Reports

- Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fifth season
.....Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Seria YAMAZAKI, Nonoka ISHIZAKI and Motoharu ARIMURA 3
- Preliminary Report on the Eleventh Season of the Work at al-Khokha Area
in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition
.....Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI,
Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, and Yuka YONEYAMA 25
- Report of the Activity in 2018, Project of the Solar Boat
.....Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA 44

調査報告

エジプト ダハシュール北遺跡調査報告 — 第 25 次発掘調査 —

吉村 作治*¹・矢澤 健*²・近藤 二郎*³・柏木 裕之*⁴
山崎 世理愛*⁵・石崎 野々花*⁵・有村 元春*⁶

Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fifth season

Sakuji YOSHIMURA*¹, Ken YAZAWA*², Jiro KONDO*³, Hiroyuki KASHIWAGI*⁴
Seria YAMAZAKI*⁵, Nonoka ISHIZAKI*⁵, Motoharu ARIMURA*⁶

Abstract

The joint expedition of Higashi Nippon International University and Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as the field chief, carried out an excavation at the cemetery of Dahshur North on February 2018. In this season, the area located at the northernmost part of the cemetery was investigated (Fig.1). The area measures 10 m (north-south) by 20 m (east-west), and eight shaft tombs were identified. Five of them (Shaft 150-153, 155) were cleared, which are dated to the late Middle Kingdom mostly by accompanying pottery vessels, except Shaft 150 which appeared to be made in the early New Kingdom. The most remarkable discovery was Shaft 151 which has three subterranean chambers, two to the south (the uppermost and lowermost chambers) and one to the north (mid-level chamber). Although it was already plundered, a considerable amount of pot-sherds and painted plaster fragments as well as an eye inlay once adorned with a mummy mask or an anthropoid coffin, were retrieved. In addition to a discovery of a painted ear fragment made of plaster, some of plaster fragments have depictions of an eye and a part of collar decoration, and fragments with cursive hieroglyphs were also found at the lowermost chamber, all of which appeared to comprise of mummy mask(s). Pottery vessels found at the lowermost chamber appear to be earlier than vessels derived from the uppermost chamber, which leads to the assumption that the lowermost chamber was made at first, and then the middle and uppermost chambers were made successively. While shaft tombs with multiple chambers were often attested in the Middle Kingdom cemetery, a case that the sequence of making and using chambers can be archaeologically determined is quite rare, which makes our result noteworthy.

1. はじめに

ダハシュール北遺跡は、衛星リモートセンシングを活用した調査によって 1995 年に発見された墓地遺跡

- * 1 東日本国際大学学長・教授
- * 2 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授
- * 3 早稲田大学文学学術院教授
- * 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
- * 5 日本学術振興会特別研究員 (DC)
- * 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

- * 1 *President, Professor, Higashinippon International University*
- * 2 *Visiting Associate Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
- * 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*
- * 4 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
- * 5 *Reserch Fellow (DC), Japan Society for the Promotion of Science*
- * 6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

である(図1)。新王国時代の人物「イバイ」、「パシェドゥ」のトゥーム・チャベルが発見され、周囲からは同時代のシャフト墓、土壌墓が多数出土した。2004年からは遺跡の西側に位置し、同じく新王国時代に造営された「タ」のトゥーム・チャベルとその周辺を重点的に調査し、2005年にはこのトゥーム・チャベルの下から中王国時代の人物「セヌウ」の墓が埋葬時の状態で見つかった。当該地区からは類似した中王国時代のシャフト墓が多数発見され、この遺跡が中王国・新王国の両時代で活発に利用された墓地であることが分かってきた。2015年には「イバイ」と「タ」の間の地区で発掘調査が実施され、中王国時代の墓とともに、日乾レンガによる壁体を持ち、「パシェドゥ」墓と類似した地下室を持つ新王国時代の墓(シャフト125)が発見された¹⁾。

これまでに発見された「イバイ」、「パシェドゥ」、「タ」墓やシャフト125など地上構造物を備えた大型の遺構は、いずれも自然地形の高所に位置し、遺構の選地と地形との関係が注目された。そこで、前回調査では「イバイ」墓北東の高所に調査区を設定し発掘を実施した。その結果、これまでに確認されていた中王国時代、新王国時代の埋葬の中でも比較的古い時期の遺構が発見され、両時代初期の様相や墓地の形成過程を検討するための有益な資料が得られた(Yoshimura et al. 2018b; 吉村他 2018)。今期調査ではダハシュール北遺跡の北端中央部にある高所に調査区を設定し(図1)、発掘調査を実施した²⁾。以下にその成果を報告する。

2. 地上部の発掘調査

ダハシュール北遺跡グリッド3E北端付近、南北10m、東西20mの範囲に調査区が設定され、地上部の発掘が実施された。対応するグリッドは3E97c-d、98c-d、3F07a-b、08a-bである(図1)。表層の砂礫を除去したところ、8基のシャフト墓(シャフト150~157)が発見された。今期調査ではこの内5基の発掘を実施した。

3. シャフト墓の発掘調査

(1) シャフト150

①遺構の概要(図2)

シャフト150はグリッド3F07aに位置しており、シャフト部の平面は南北0.9m、東西1.9mであった。長軸の方向は地軸の東西にほぼ一致している。シャフト部の深さは3.9mであり、床面は隣接するシャフト151の地下室(B室)の天井と接触し、大部分が失われていた。シャフト部の底部から東西に部屋が掘削され、東側のA室は南北2.2m、東西2.5mの矩形をし、天井高は1.1mであった。西側のB室は南北2.0m、東西2.7mの矩形平面で、天井高は1.0mである。A室、B室ともに天井の岩盤は脆く、大部分が崩落していた。また、どちらの部屋も開口部の幅はシャフトの幅よりやや狭く作られていた。

シャフト部は風成と考えられる砂で満たされていた。A室、B室ともにシャフト部から流れ込んだ砂が厚く堆積し、その上を天井から崩落した岩盤のタフラ塊が覆っていた。A室、B室からは土器片、紐の断片、炭化物、木片などがわずかに出土したが、どちらも埋葬の明確な痕跡は無く、人骨も見られなかった。新王国時代第18王朝中期以前に年代づけられる土器が含まれていたことから、シャフト150は本遺跡における新王国時代の遺構でも最古級に位置付けられる可能性があるが、土器は外から流れ込んだ可能性も捨てきれない。少なくとも周囲に同時代の遺構が位置していた蓋然性は高く、注目される結果と言える。

②出土遺物

図3にシャフト150から出土した土器を掲載した。図3.1と図3.2は胎土がNile B2³⁾で、断面が台形を呈し底部の中心に穿孔を有し、「フラワーポット(Flowerpot)」としばしば呼称される(Holthoer 1977: 83-84;

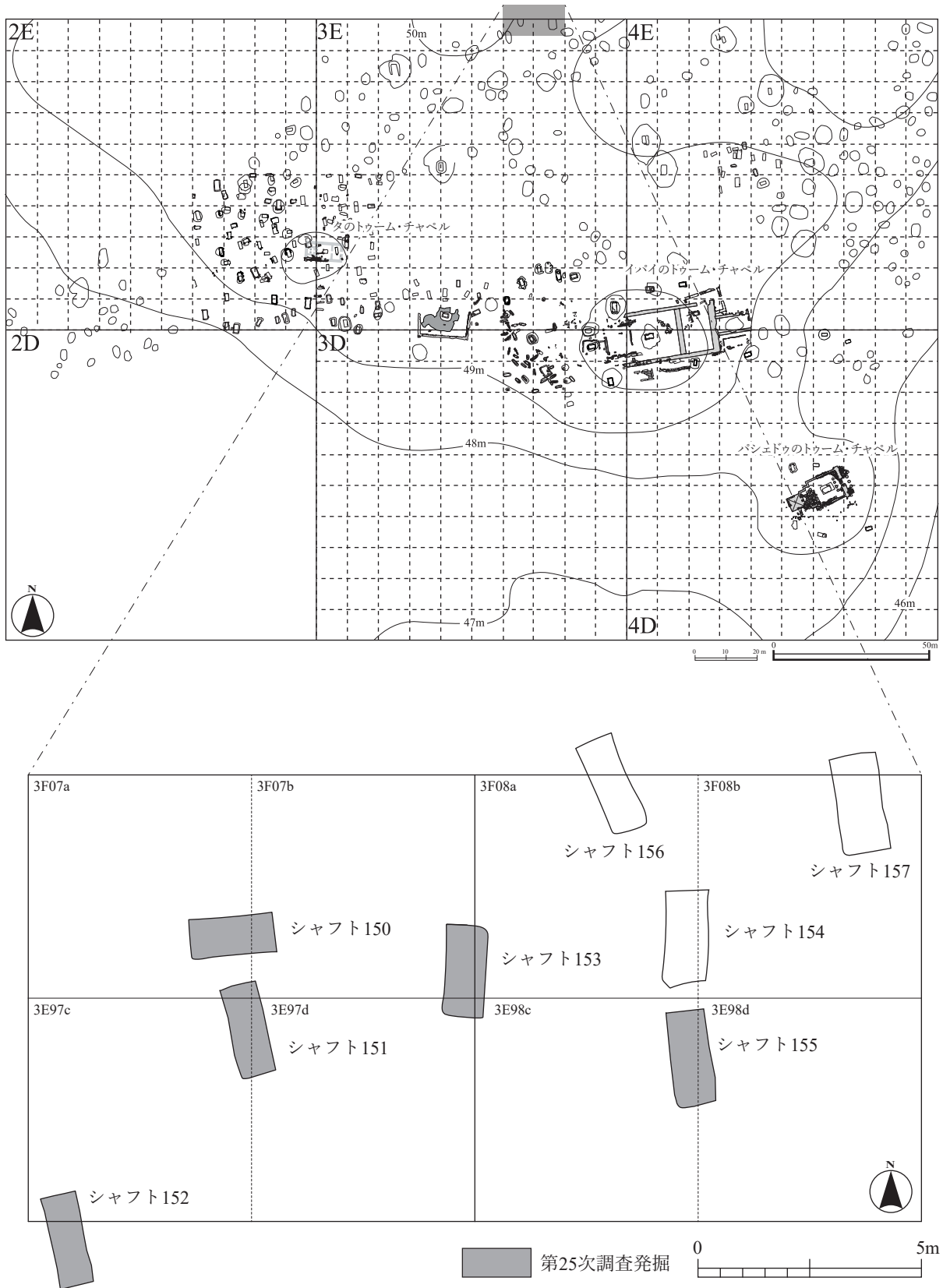


図1 ダハシュール北遺跡の地図と第25次発掘区

Fig.1 Map of Dahshur North and the excavated area in 25th season.

Rose 2016: 214)。図3.1はA室とシャフト部から出土した断片で構成され、図3.2は主にB室出土の断片から復元された。この器形は第18王朝のハトシェプストの治世で一般的に見られるようになり、アメンヘテプ3世の治世では見られなくなると言われている (Williams 1992: 34-35)。近傍のコム・ラビア遺跡では、第18王朝初期からハトシェプストまたはトトメス3世治世に年代付けられた層から同種の器形が発見されている (Bourriau 2010: 5, 81, Fig.24.4.10.4-9)。図3.3は Nile B2 の長頸壺で、頸部と胴部に黒色の帯状の彩色が認められた。黒色の帯を施すのは第2中間期後半から第18王朝中期までにかけて見られる装飾とされている (Hope 1989: 7)。

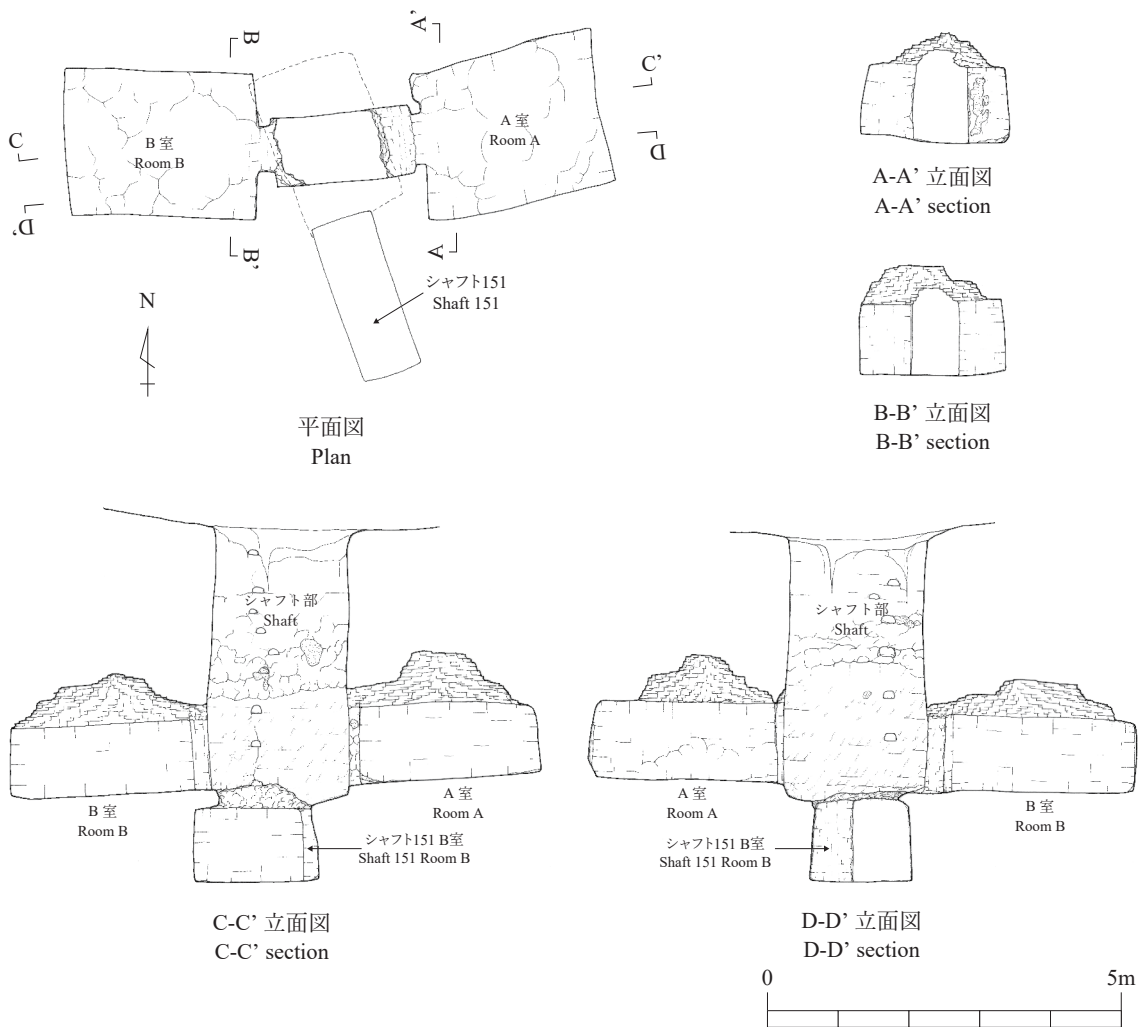


図2 シャフト150平面・立面図
Fig.2 Plan and sections of Shaft 150

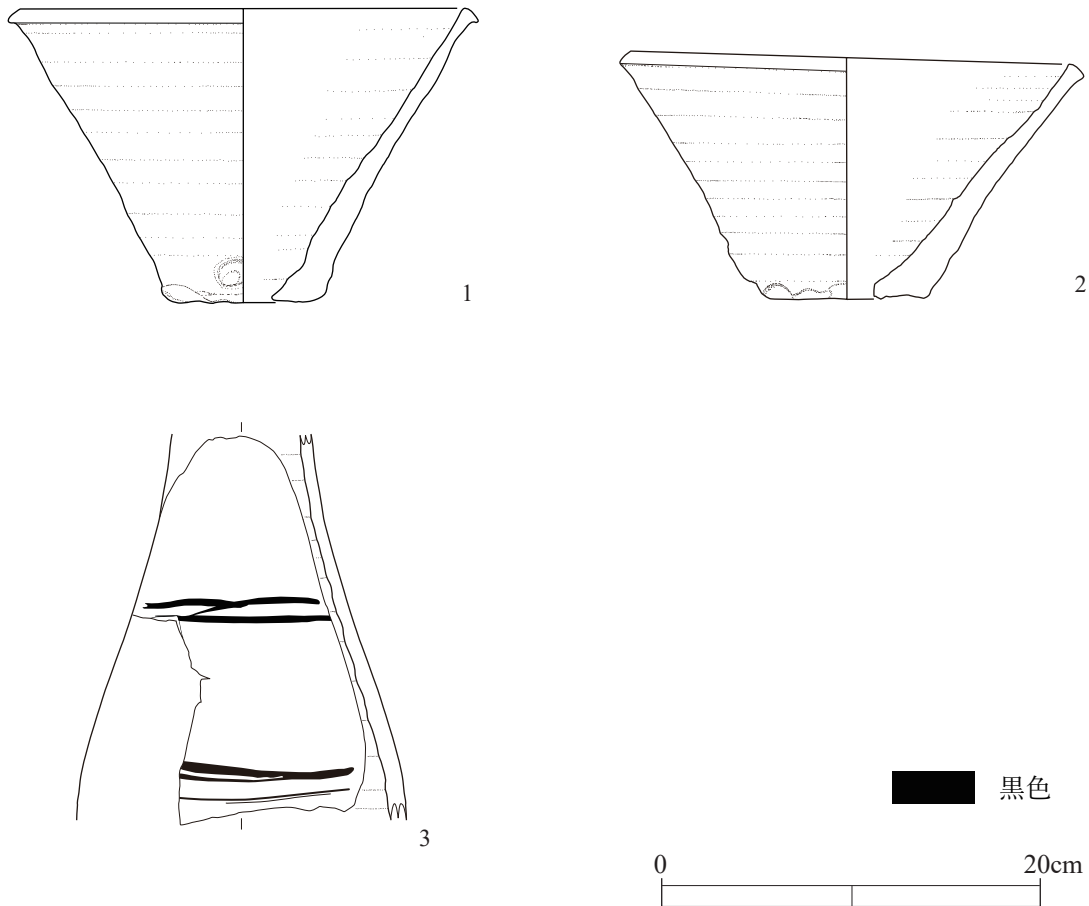


図3 シャフト150出土土器
Fig.3 Pottery vessels from Shaft 150

(2) シャフト151

①遺構の概要 (図4)

シャフト151はグリッド3E97のcからdにまたがり、シャフト部の平面は南北2.1m、東西0.8mであった。長軸は概ね南北方向だが、やや反時計回りに傾いている。シャフト部の深さは6.1mで、北側に1つ、南側に2つの部屋がそれぞれ異なる深さで掘られ、全体で3層の構造になっている。第1層(最上部)のA室は南側に設けられ、南北1.9m、東西0.9mの長方形平面で、僅かに屈曲している。天井高は1.1mであった。第2層は北側に部屋(B室)が掘削されていた。B室の平面は南北が2.3m、東西1.6m、天井高は1.1mであり、東側に部屋が拡張されていた。また、上述のようにシャフト150のシャフト部とB室が接しており、B室の天井は大部分が失われていた。第3層は南側に部屋(C室)があり、C室平面は南北が2.1m、東西が0.8mの長方形で、天井高が1.1mであった。

シャフト151内部の堆積の断面図を図5に示した⁴⁾。シャフトの上部は風成の細砂が堆積しており(図5-1、4)、A室にも同じ細砂が流れ込んでいた(図5-2)。A室の奥にはタフラの堆積(図5-3)が認められた。A室からはミイラマスクの一部と考えられる彩色プラスター片、ミニチュアの皿形土器を含む土器片、炭化物、布、木片、人骨が出土した。シャフト部のA室床面レベルより下の層(図5-4、5、6)では、A室から出土した土器片と接合する土器が複数あり、本来A室に置かれていたものが、シャフト部に落下したと考えられる。これらの層からは土器片、彩色プラスター片、炭化物、木片が出土しており、特筆すべきは眼の

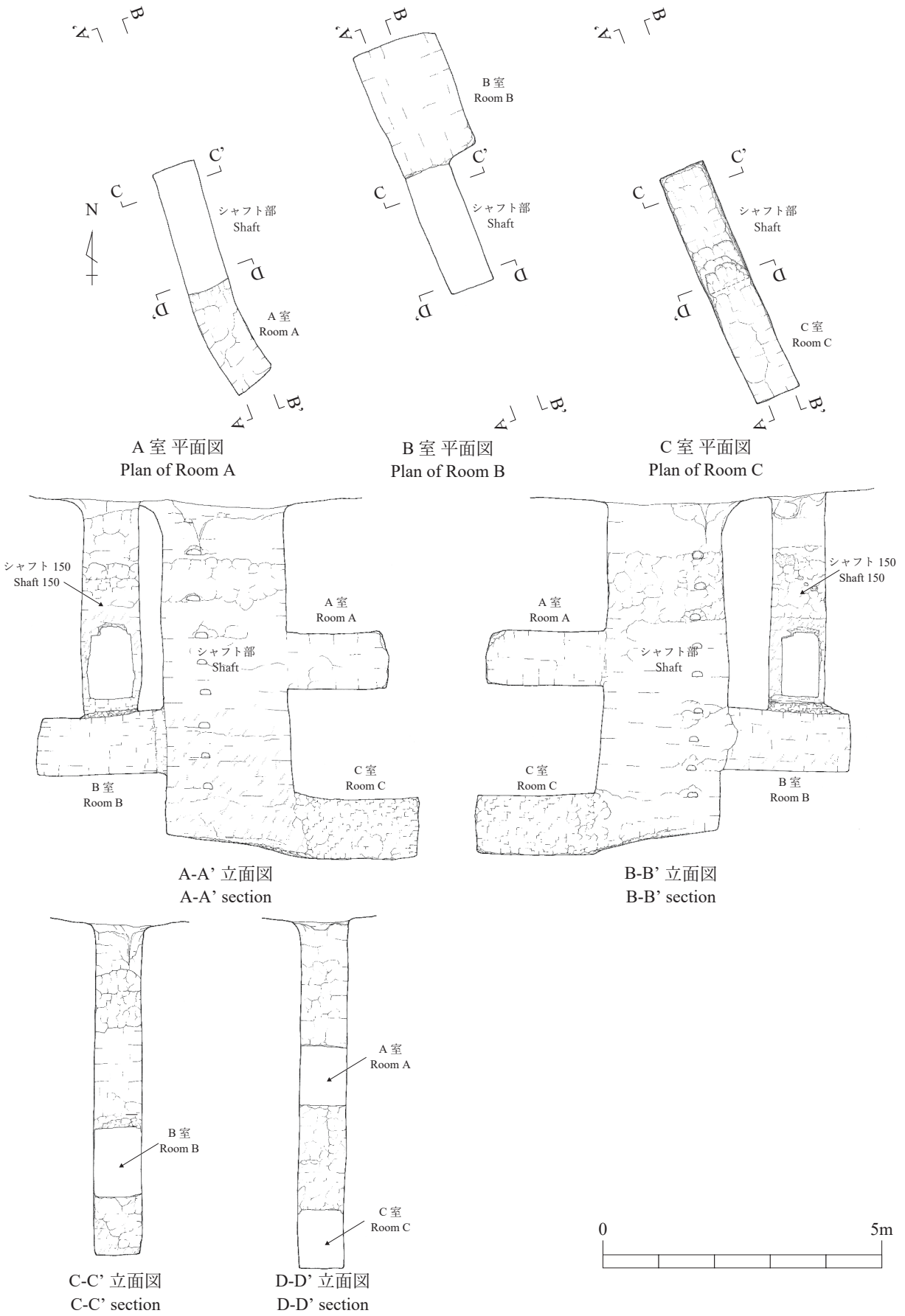


図4 シャフト151平面・立面図
Fig.4 Plans and sections of Shaft 151

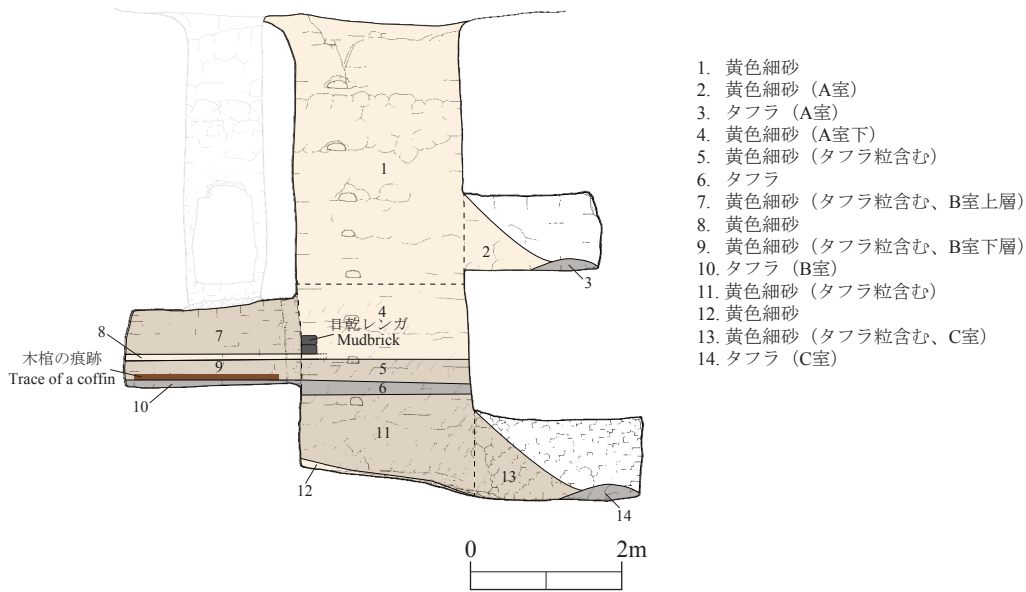


図5 シャフト151堆積図
Fig.5 Stratigraphy of Shaft 151

象嵌で図5-5の層（タフラの混じった黄色細砂層）から出土した。象嵌はミイラマスクまたは人型木棺の右眼と推測される。

B室は隣接するシャフト150からの土砂の流入があり、やや複雑な様相を呈する。図5-7はタフラ粒が含まれた砂層で、その下に薄い細砂の層（図5-8）があり、その下にタフラ粒を含む砂層（図5-9）が堆積していた。B室の開口部付近では図5-8の層の上に日乾レンガが積まれていた。層序や位置から見て日乾レンガはB室の埋葬の際に部屋の封鎖に使用されたものではなく、シャフト150掘削後に侵入した者が土留めのような目的で設置した蓋然性が高い。B室の床面上にはタフラの層（図5-10）があり、これは図5-6のタフラ層と連続していたと推測される。この層の上面から箱型木棺の底部が発見された。木棺は劣化が著しく、残存している部分は長辺180cm、短辺42cmで、装飾等は不明だった。床面の直上から発見されたわけではないため、埋葬時の原位置ではないと考えられる。B室からはその他に人骨、土器片、炭化物、プラスチック片、木片が出土した。

シャフト部の図5-6の下はタフラ粒を含む砂層に変わっており（図5-11）、その下部では多くの土器が発見された。また、シャフトの最下部では薄い砂層（図5-12）があり、土器片および貝の破片が出土した。C室の入口付近のタフラ粒を含む砂の厚い堆積（図5-13）は図5-11の堆積と連続している。C室奥側にはタフラで構成された層があり（図5-14）、土器片、彩色プラスター、木片、人骨、炭化物、貝片などが含まれていた。このタフラ層からは白色プラスター製の等身大の耳が発見された。またC室内には彩色された眼の画像や黒色のヒエログリフが縦に書かれたプラスターの断片が散らばっており、耳とともにミイラマスクを構成していたと推察される。

②出土遺物

a) 眼の象嵌（図6.1）

シャフト部、南東コーナー付近の図5-5の堆積層から出土した。虹彩に当たる黒色部分が白目部の正面に嵌め込まれており、目頭と目尻部分が赤色に塗られていた。その他の面にも赤い顔料が付着していた。黒目

部はガラス質の石材で、おそらく黒曜石、白目部分はエジプシャン・アラバスターと思われる。

b) 白色プラスター製耳（図 6.2）

等身大の白色プラスター製の耳であり、C室のタフラ層（図 5-14）から出土した。表側は黒の彩色が一部残存しており、本来は全面が黒色だったと推測される。裏側にはモルタルが付着しており、ミイラマスクへの接着に使用されていたと考えられる。また、裏側には淡青色の顔料が一部付着しており、ミイラマスクの鬘部分は同色に塗られていたと推測される。

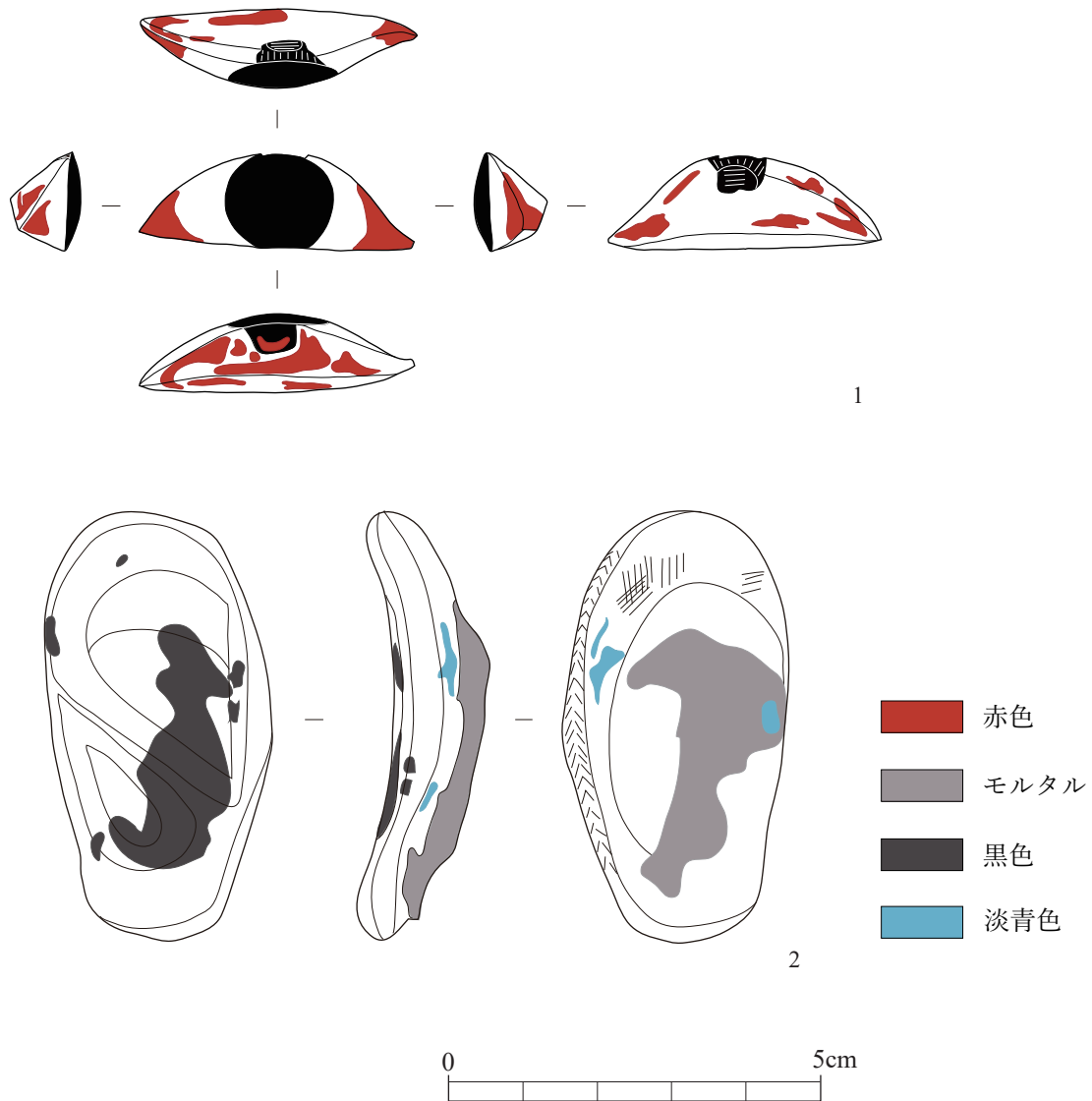


図6 シャフト151出土象嵌、プラスター製耳
Fig.6 An eye inlay and a plaster ear from Shaft 151

c) 彩色プラスター片 (図7)

A室のタフラ層(図5-3)から多数の彩色プラスターが出土している。図7.1はその1つであり、ミイラマスクあるいは人型木棺の襟飾りに該当する可能性が高い。図7.2はC室のタフラ層(図5-14)から出土した眼の部分が描かれたプラスター片で、虹彩が褐色で、瞳孔の部分が黒色で表現されていた。図7.3は主にC室のタフラ層から出土した、ヒエログリフの文字が書かれたプラスターの断片群である。縦方向の分割線が引かれ、その間に黒色で文字が書かれていたことが看取される。襟飾りの下部に縦方向の碑文が書かれたミイラマスクはこれまでも報告された例がある(Lacau 1903-1904: 165-166, pl.XXI)。図6.2の白色プラスター製耳や図7.2、図7.3は全てC室のタフラ層から出土しており、付近には頭蓋骨片も集中していた。したがって、これらはC室の被葬者に被せられていたミイラマスクの一部であった可能性が高い。

d) 土器 (図8)

図8にシャフト151から発見された主な器形を掲載した。

図8.1~14は平底のミニチュア皿形あるいは鉢形で、整形が粗く、底部は糸切りの痕がそのまま残されている。胎土はNile B2とCのものがあり⁵⁾、A室、B室、C室、シャフト部に散在していた。図8.15はNile Cの小型碗形でA室のタフラ層から出土した。



1



2



3

図7 シャフト151出土彩色プラスター片
Fig.7 Painted plaster fragments from Shaft 151

図 8.16 は Nile C の中型の平底鉢形で、胴部が僅かに外反する。内面のみ赤色スリップが塗布され、内面に火を受けた跡が見られた。C 室のタフラ層（図 5-14）とタフラ粒が混じった砂層（図 5-13）から発見された断片で構成されている。同種の器形は第 12 王朝初期からセンウセト 3 世の治世に年代づけられており（Schiestl and Seiler 2012: 204-206）、これまでに本遺跡で発見された中王国時代の土器の中でも古い様相を示す。図 8.17 はシャフト部の C 室開口部前で発見された Nile C の高台付きの鉢で、胴部に内側方向への屈曲を有する。図 8.18 は B 室で発見された Nile C の鉢で、同じく胴部に内側への屈曲を有する。図 8.16 ～ 8.18 は全て内面に黒斑があり、焚香に使用された可能性がある。

図 8.19 ～ 8.24 は全て小型の半球形の碗であり、胎土はどれも Nile B1 である。図 8.19 は A 室のタフラ層（図 5-3）と A 室床面レベルより下のシャフト部（図 5-4、5、6）から発見された断片で構成されている。図 8.20、8.21、8.22 も A 室床面レベルより下のシャフト部（図 5-4、5、6）から発見された断片である。図 8.23 は B 室上層（図 5-7）およびシャフト部のタフラ層（図 5-6）の断片から成り、図 8.24 はシャフト部タフラ層（図 5-6）、C 室開口部前（図 5-11）、C 室タフラ層（図 5-14）から出土した断片が接合されたものである。

図 8.25 は Nile B2 の小型ピーカー形で、A 室タフラ層（図 5-3）と A 室床面レベルより下のシャフト部（図 5-5、6）からの断片で構成される。図 8.26、8.27 の Nile C の円錐形の土器はおそらく輪積み成形で、内面、外面ともに縦方向に指で調整した跡が残されている。図 8.26 は A 室入り口付近の砂層（図 5-2）とシャフト部 C 室前（図 5-11）、図 8.27 はシャフト最下部の砂層（図 5-12）と C 室タフラ層（図 5-14）出土の断片で構成されている。

図 8.28 は Nile B1 で C 室のタフラ層（図 5-14）から出土した。口縁部が外反し、内外の両面に赤色スリップが塗布され、外面は磨研調整が施されていた。また、口縁上部の内外両面に白色の付着物が認められる。特徴から、これはおそらく球状の胴部を持ち、漏斗状の外反する頸部を持つ広口壺の口縁部断片と考えられる（cf. Schiestl and Seiler 2012: 400-403）。

図 8.29、8.30 は胎土 Nile C の大型の壺で、「ビール壺」と呼ばれ、中王国時代の遺跡では頻出する器形である⁶⁾。図 8.29 はシャフト部の A 室床面以下の堆積（図 5-4、5）から成り、図 8.30 はシャフト部のタフラ層（図 5-6）から発見された。ビール壺の頸部の形状から時期を推定する研究が行われており、R. シストルと A. ザイラーによる分類では Class 3f1 または Class 5 に類似する例が見られ、第 13 王朝前半または第 1 四半期に年代づけられている（Schiestl and Seiler 2012: 665, II.H.3.f.1.1, 2, 3, 673, II.H.5.1, 2）。また、主にテル・アル＝ダバアの資料を用いて口唇部の径を厚みで割った商に 100 を乗じた数値（Aperture Index 2）で時期を推定する研究がある（Szafranski 1998; Bader 2009: 160-177）。本例に当てはめると図 8.29 は 532、図 8.30 は 495 という数値を示し、テル・アル＝ダバアの d/1 層（およそ 350 から 650 の範囲、平均 528.8）の例に近似する。この層は第 13 王朝の第 1 四半期に該当する（cf. Szafranski 1998: Fig.5）。

その他、図 8.31 は Marl C の大型の広口壺で、B 室のタフラ粒を含む黄色細砂の層（図 5-9）から出土した。内面、外面のほぼ全面にタフラが付着していたため、堀具のような用途で使用された可能性が高い。図 8.32 はシャフト部から発見された、Nile B2 による閉口器形のミニチュア土器の底部断片である。図 8.33 は Nile B2 の器台で、A 室のタフラ層（図 5-3）、シャフト部の A 室床面以下のレベル（図 5-4、5）から発見された断片で構成される。

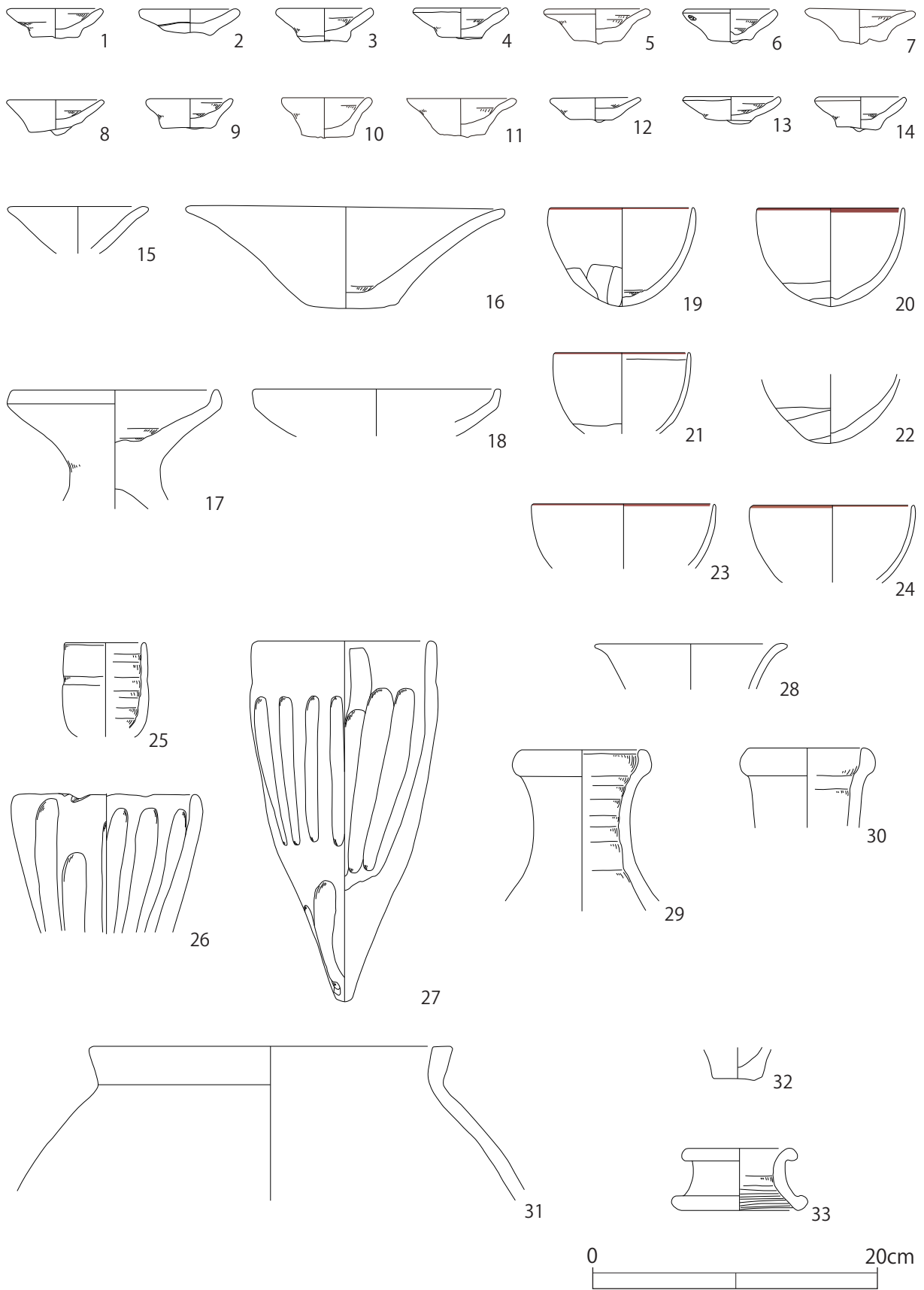


図8 シャフト151出土土器
Fig.8 Pottery vessels from Shaft 151

③出土土器と遺構の特徴から推測されるシャフト 151 の拡張過程

シャフト 151 の顕著な特徴は、A、B、C の各部屋がそれぞれ異なる高さに作られ、かつ南北交互に部屋が設けられている点である。土器の出土状況や年代からこれらの部屋が使用された過程について考察を試みたい。

前述の平底の鉢形土器（図 8.16）は、類例から第 12 王朝初期からセンウセレト 3 世の治世（アメンエムハト 3 世との共同統治前⁷⁾）の範囲に年代づけられている。この土器の断片は C 室タフラ層（図 5-14）から出土しており、この層にはミイラマスクの断片も集中していた。更に床面の直上にある点から、これらの遺物は C 室に埋葬されていた副葬品の一部と推測される。過去に指摘されているように、この墓地がセンウセレト 3 世ピラミッド周辺の墓地に埋葬された王族・高官と関係があった人々によって造営が開始されたならば（吉村他 2018: 153）、センウセレト 3 世治世頃の埋葬が存在することは不自然ではなく、平底の鉢形土器の年代とも矛盾しない。一方、ビール壺（図 8.29、8.30）は、第 13 王朝第 1 四半期という年代を示していた。これらはシャフト部の堆積（図 5-4、5、6）から出土しており、これらの層から出土した土器片には A 室タフラ層（図 5-3）出土土器片と接合したものが少なくとも 3 個体あることが確認されている（図 8.19、8.25、8.33）。即ちこの墓が盗掘を受けた後、本来 A 室にあった土器の一部がシャフト部に落下したと考えられ、図 8.29、8.30 も A 室由来である可能性が高い。以上から、C 室由来の土器と A 室由来と推測される土器は、前者が第 12 王朝センウセレト 3 世治世、後者が第 13 王朝第 1 四半期に年代づけられ、シャフトの下部と上部で一定の時間的隔たりがあった可能性が示唆される。

次に、小型の半球形碗に着目したい。この器種は、口径と器高の比率である「ベッセル・インデックス（以下 VI）」を用いた研究によって、年代が新しくなるにつれ浅い形状から深い形状へ変化していくことが知られている（Arnold 1982: 60-62, Abb.17; Arnold 1988: 140-141, Fig.75; Bietak 1984: 480-481, Fig.III.2; Schiestl and Seiler 2012: 84）。半球形碗の形状が深くなるにつれ、ベッセル・インデックスの数値は減少していく。シャフト 151 から出土した半球形碗の場合、図 8.19、8.20 の VI はそれぞれ 150、152、図 8.21、8.23、8.24 は底部が欠損しているものの曲線から推定されるおおよその器高から算出してそれぞれ 153、200、189 という数値だった。図 8.19、8.20、8.21 の 3 点は近似する数値を示しているのに対し、図 8.23、8.24 はこれに比して明らかに浅い輪郭、即ちより古い時代の数値を示している。

図 8.24 は C 室のタフラ層（図 5-14）から発見された断片を含んでおり、C 室に埋葬されていた副葬品に由来すると推測される。図 8.23 は B 室の上層（図 5-7）から出土した断片とシャフト部のタフラ層（図 5-6）から出土している。B 室はシャフト 150 掘削時に攪乱を受けており、その上層から発見された断片とシャフト部タフラ層出土断片だけの構成では、本来の帰属を推測することは難しい状況である。一方、図 8.19 は A 室床面直上のタフラ層（図 5-3）から出土した断片を含み、それ以外は A 室床面レベルより下のシャフト部の堆積（図 5-4、5、6）から発見されている。図 8.19 と類似する輪郭を持つ図 8.20、8.21 も、同様に A 室床面レベルより下のシャフト部の堆積（図 5-4、5、6）から出土している。既述の通り、このシャフト墓が盗掘を受けた後、本来 A 室にあった土器の断片の一部が、シャフト部に落下したと考えられることから、図 8.20、8.21 も A 室から崩落した断片である可能性が指摘できる。ベッセル・インデックスでは、C 室由来の図 8.24 が 189 という数値を示すのに対し、A 室由来と推測される図 8.19、8.20、8.21 が 150 程度であり、器形の深浅の差が認められた。したがって、C 室由来の半球形碗は A 室由来と推測されるものより相対的に古いということが言える。

土器から C 室が古く、A 室が新しいという新旧関係が指摘されたが、B 室については隣接するシャフト 150 からの土砂の流入があるため、出土遺物から新旧を検討することは難しい。しかし、上部の部屋ほど新

しいという傾向を受け入れるならば、それぞれの位置関係から C 室、B 室、A 室の順で使用されたという過程が想定される。本遺跡で発見された未盗掘のシャフト墓の調査成果から (Baba and Yazawa 2015)、墓は埋葬が行われた後、主に岩盤の掘削排土であるタフラでシャフト部が埋められていたと考えられる。また、本遺跡を対象とした既往の研究 (柏木 2009) では、シャフトの掘削と地下室の掘削は同時ではなく別々の計画で進められており、被葬者がまだ決定されていない状況、もしくは埋葬される人物は決まってもその存命中にシャフトの掘削だけが先に進められた可能性が提示されている。言い換えれば、埋葬が行われる直前の段階で地下室が仕上げられたということになる。これらの前提に立脚すれば、最初に C 室で埋葬が行われた後にシャフトはタフラで一旦埋められ、追葬が行われた際に詰められたシャフト部のタフラは C 室より上のレベルまで取り除かれ、B 室の掘削と埋葬が行われた。その後再びシャフトはタフラによって埋められた。更に A 室を利用した追々葬では、同様に B 室の天井よりも上のレベルまでタフラが取り除かれ、埋葬終了後に再度シャフトは埋められたと推測される。このような拡張過程を想定した場合、C 室天井レベルと B 室床面レベルの差、および B 室天井レベルと A 室床面レベルの差がどちらも約 0.4m で、一定の間隔が開けられているのは、追葬時に下にある部屋の埋葬を荒らさないように配慮した結果と見ることもできるだろう。また、南北交互に部屋が掘削されているのは、部屋の近接による崩落を回避するための措置と解釈することもできる。

その場合、部屋が南北交互に作られ、C 室と B 室、B 室と A 室の間隔が同一であることから、この墓の過去の利用状況を把握していた人々が、墓の造営に関与していた可能性が挙げられる。既存の埋葬を攪乱しない形で追葬が行われた様子からも、血縁者など生前に親密な関係があった人々によって墓が共有されていた可能性は大いに考えられるが、被葬者の関係を明確に示す出土資料は今のところ得られていない。

(3) シャフト 152

①遺構の概要 (図 9)

シャフト 152 はグリッド 3E97a から c に跨っており、シャフトの平面は南北 2.1m、東西 0.7m で長軸の方向は概ね南北である。シャフトの深さは 2.2m であり、埋葬室は作られていない。

シャフト 152 は既に盗掘を受けていたと考えられ、底部まで風成の細砂が堆積し、人骨、土器片、彩色プラスチック片などが含まれていた。底部付近で木棺片が出土していたことから、被葬者は木棺に収められ、シャフト底部に安置されていたと推測される。また、白色プラスターで形作られた等身大の右耳の断片が出土しており、ミイラマスクもしくは人型木棺が使用されていたと考えられる。類似する耳形のプラスター製品は約 5m 北東にあるシャフト 151 の C 室タフラ層からも出土しており、シャフト 151C 室とシャフト 152 は時期が近い可能性がある。土器は中王国時代のビール壺の断片が含まれており、アメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられる。

②出土遺物

a) 白色プラスター製耳断片 (図 10)

プラスター製の右耳の上側断片で、表側は黒色で塗られており、裏側にはマスクあるいは人型木棺頭部に接着されていた面にモルタルが付着していた。裏側には一部淡青色の顔料が付着していた。これらの特徴から、おそらくミイラマスクまた人型木棺の肌は黒色で表現され、鬢部分は淡青色で塗られていたと考えられる。

b) 土器 (図 11)

出土した土器からは、2 個体分の大型壺の口縁部断片が確認された。中王国時代のいわゆるビール壺であり、胎土は Nile C、頸部が僅かに外反し、断面が三角形を呈する口縁部を有する。形状からアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられる⁸⁾。

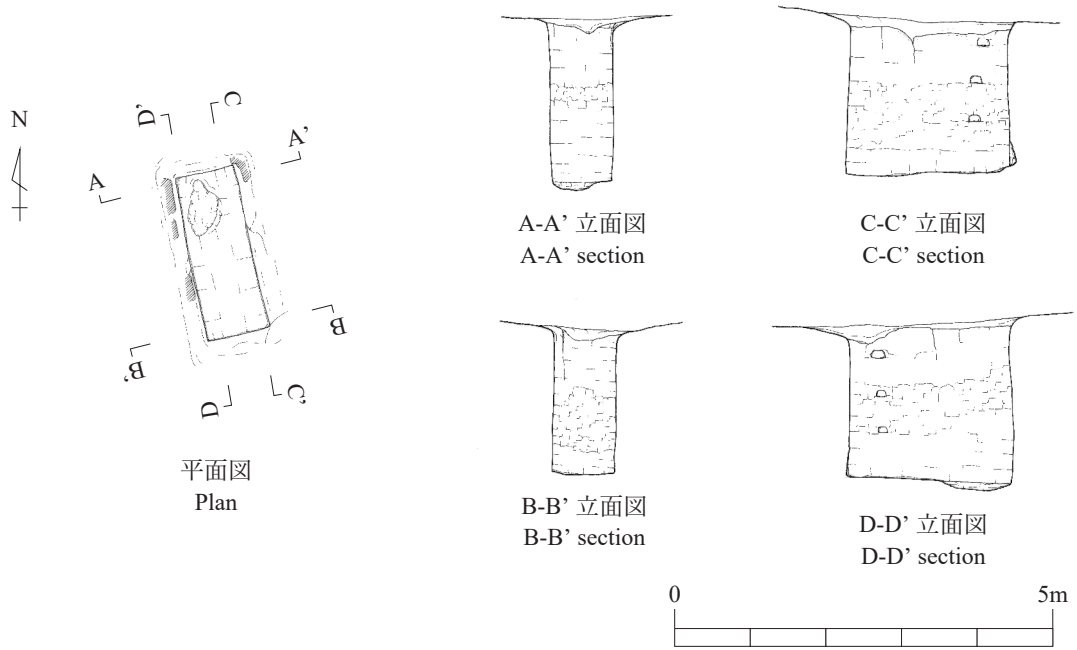


図9 シャフト 152 平面・立面図
Fig.9 Plan and sections of Shaft 152

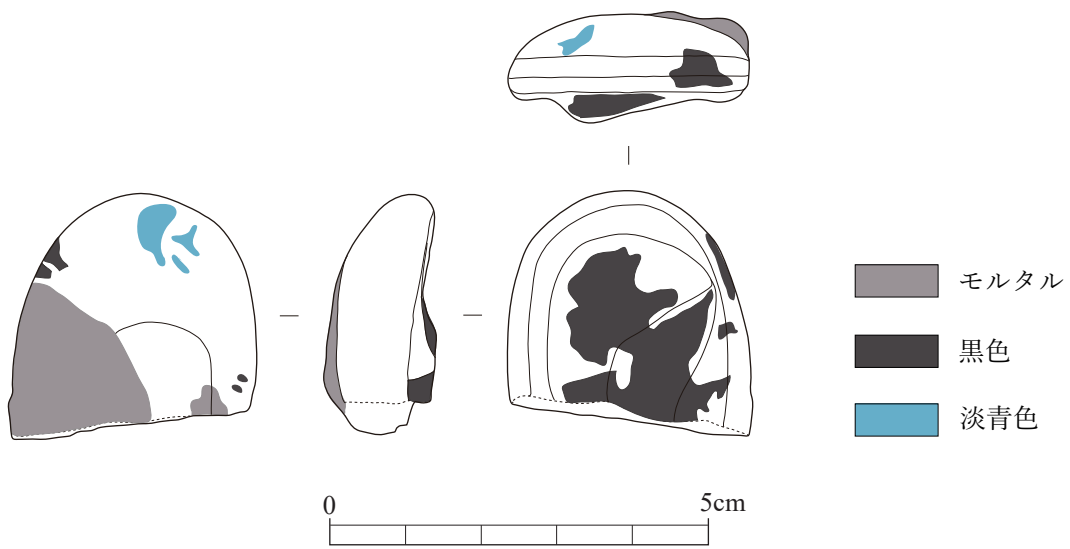


図 10 シャフト 152 出土プラスター製耳
Fig.10 A plaster ear from Shaft 152

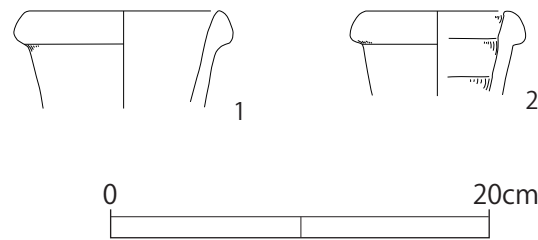


図 11 シャフト 152 出土土器
Fig.11 Pottery vessels from Shaft 152

(4) シャフト 153

①遺構の概要 (図 12)

シャフト 153 はグリッド 3F07b 南東端に位置しており、シャフトの平面は南北 2.0m、東西 0.9m で長軸の方向は南北である。シャフト部の深さは 4.3m で、底部から北側に埋葬室が設けられていた (A 室)。A 室の平面は南北 2.0m、東西 0.9m で、天井高は 1.1m であった。

シャフト 153 は既に盗掘を受け、シャフト部と A 室には細砂が堆積し、A 室の床面付近にはほぼタフラで構成される層が認められた。人骨がシャフト部と A 室の両方で出土しており、シャフト部では様々な高さで人骨が断続的に出土するという特徴が見られた。その他、土器片、木片、プラスター片が出土した。A 室とシャフト部から出土した土器片には、大型の鉢や中王国時代のビール壺の断片が含まれていた。頸部の形状はアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられると考えられ、この時期に埋葬が行われたと推測される。

②出土遺物 (図 13)

図 13.1 はシャフト部で発見された Nile C の大型鉢の断片であり、図 13.2 は A 室のタフラ層から出土した Nile B2 の大型鉢もしくは碗の口縁部断片である。図 13.3 と 13.4 は中王国時代のビール壺であり、どちらもシャフト部と A 室から発見された断片で構成され、後者は地上部 (3F07b) から出土した断片も接合した。図 13.3 の頸部は僅かに外反し、断面が三角形を呈する口縁であり、形状からアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられる⁹⁾。

(5) シャフト 155

①遺構の概要 (図 14)

シャフト 155 は 3E98c から d にまたがっており、シャフトの平面は南北 2.1m、東西 0.9m で長軸の方向は南北である。シャフトの深さは 3.4m で、底部はシャフト部の西面、北西側が拡張されていた。拡張された部分の平面は南北 2.4m、東西 0.8m、床面から拡張部の天井までの高さは 1.1m である。拡張部の南半は僅かに掘り窪められていた。

シャフト 155 は既に盗掘されており、シャフト部の堆積は細砂が主で、下部ではタフラ粒が混入していた。シャフト底部の床面上には締まりの強いタフラの層が堆積していた。土器片、木片、人骨、カルトナーージュ片、プラスター片などが出土し、床面上のタフラ層からは等身大の木製の耳が発見された。この耳はミイラマスクもしくは人型木棺の一部と考えられる。土器は口縁上部に赤彩を持つ半球形の碗とビール壺が含まれており、両者とも中王国時代の典型的な器形で、埋葬がこの時代に執り行われたことを示している。

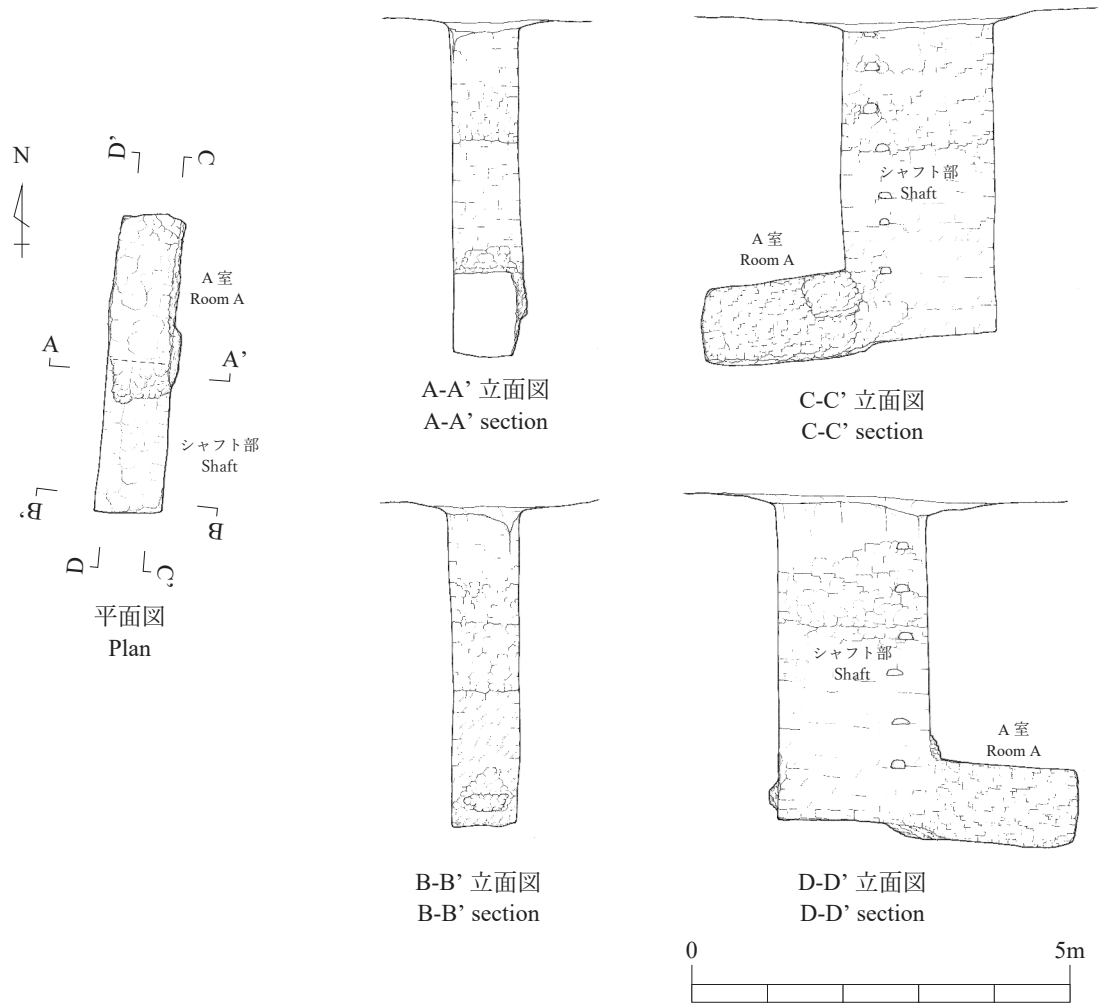


図12 シャフト153平面・立面図
Fig.12 Plan and sections of Shaft 153

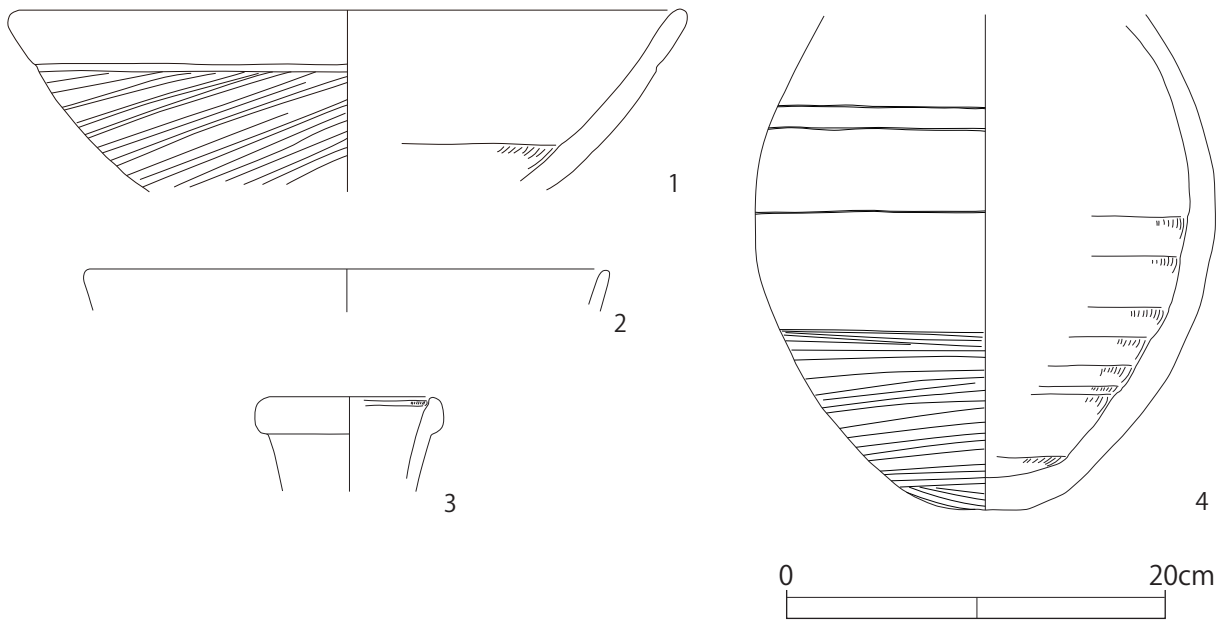


図13 シャフト153出土土器
Fig.13 Pottery vessels from Shaft 153

②出土遺物

a) 木製耳 (図 15)

彫刻による等身大の木製の右耳であり、シャフト床面上のタフラ層から出土した。表側の面には彩色は残っておらず、木目が露呈していた。裏側にはミイラマスクもしくは人型木棺頭部への接着に使用されたと考えられる白色モルタルが付着していた。また裏側には黒の彩色が残っており、本来は表面も黒に塗られていた可能性がある。

b) 土器 (図 16)

図 16.1 はタフラ層から出土した半球形の碗の断片である。胎土は Nile B1 であり、口縁上端部に赤彩が施されていた。図 16.2、16.3 は中王国時代のビール壺の断片であり、両者は接合しないものの、特徴から同一の個体と推定される。両者はシャフト下部のタフラを含む砂層と、床面上のタフラ層から出土した断片で構成される。どちらも中王国時代の典型的な器形である。半球形の碗は上述のように最大径と器高の比率 (VI) から時期を推定する研究が行われているが、図 16.1 は胴下部が欠損しているため正確な値は不明である。口縁部の赤彩は第 12 王朝後半以降に多い特徴とされている (Schiestl and Seiler 2012: 86)。ビール壺は時期推定の要となる頸部が失われているため、埋葬の年代を示す根拠にはならなかった。

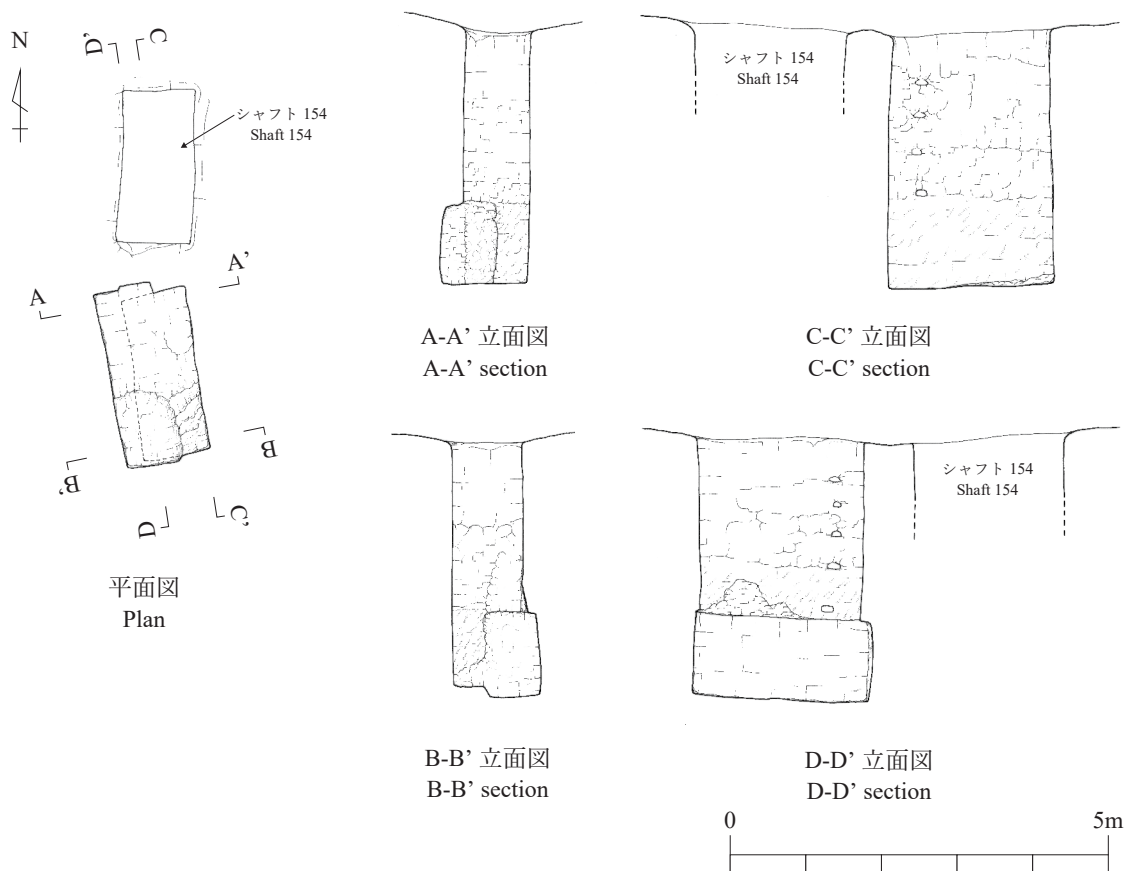


図 14 シャフト 155 平面・立面図
Fig.14 Plan and sections of Shaft 155

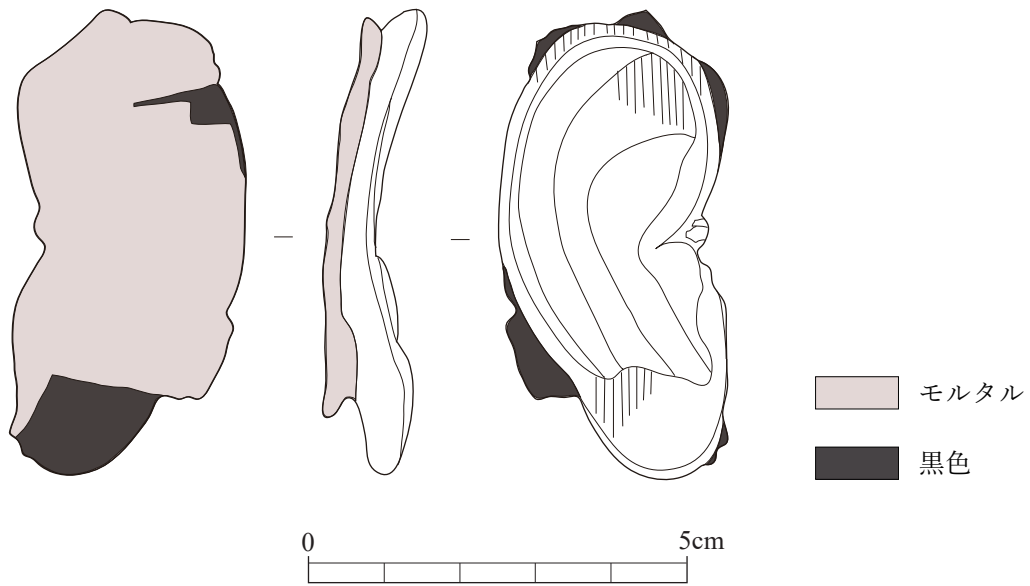


図15 シャフト155出土木製耳
Fig.15 A plaster ear from Shaft 155

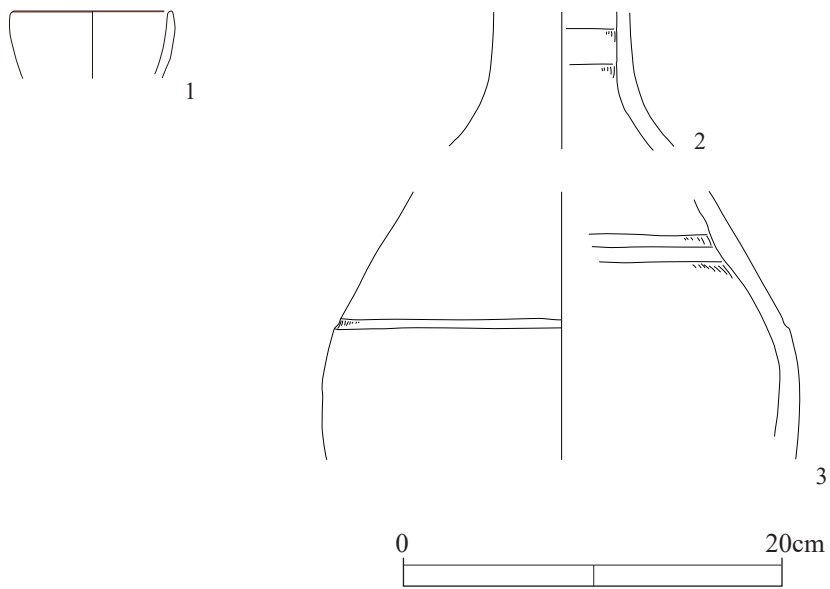


図16 シャフト155出土土器
Fig.16 Pottery vessels from Shaft 155

4. おわりに

第 25 次調査では遺跡北端中央部を調査した結果、中王国時代と新王国時代のシャフト墓が発見された。

中王国時代のシャフト墓で特筆されるのはシャフト 151 である。2つの部屋が設けられた中王国時代のシャフト墓はこれまでも発見されていたが、シャフト 151 のような 3つの部屋が上中下に配置された例は本遺跡では初出である。また上層と下層の部屋に収められたと推測される土器の新旧関係から、下層の埋葬が古く、上層の埋葬が新しいと想定された。遺構の特徴や既往の研究成果を勘合すると、最初に最下層の部屋で埋葬が行われ、シャフトが埋められた後、追葬が行われる度にシャフト部は既存の埋葬を攪乱しない深さまで掘り返され、部屋の掘削と埋葬が行われた後に再度シャフトが埋められた可能性が考えられる。他遺跡でも複数の部屋を持つ中王国時代のシャフト墓は発見されているが、その拡張と使用のプロセスについて考古学的に検討された例はなく、シャフト 151 の調査成果は注目に値する。このような墓利用のプロセスを想定した場合、被葬者どうしの関係は重要な問題であり、今後検討を要する。

今回の調査で発見された新王国時代の墓はシャフト 150 のみであった。この墓には明確な埋葬の痕跡が見られないが、発見された土器は第 18 王朝中期以前の年代を示しており、本遺跡における新王国時代の活動の中で最古級に位置付けられる。今後近傍の墓の発掘を進めることで資料を拡充し、今期調査区における新王国時代の様相を明らかにすることが望まれる。

謝辞

本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者:吉村作治、課題番号:26257010)、及び若手研究 (B)「図像・碑文資料と考古遺物の比較による古代エジプトの供物奉獻儀礼の研究」(研究代表者:矢澤健、課題番号:16K16943)の助成を受けて実施された。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーリッド・アル＝エナニー閣下(博士)、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、サッカラ査察局のサブリ・ファラグ氏、ハニー・アル＝タイプ博士、チーフ・インスペクターのムハンマド・ユーセフ博士およびムハンマド・ヘンダウイ氏、サッカラのセリーム・ハッサン遺物収蔵庫の館長ラガブ・トゥルキ氏、第 25 次調査の査察官マルワン・アブー・バクル氏に多大なご支援、ご協力をいただいた(肩書きは調査時のもの)。ここに記して感謝の意を表したい。

註

- 1) リモートセンシングを応用したダハシュール北遺跡の発見については早稲田大学エジプト学研究所 2003 を参照。第 1 次から第 13 次調査にかけての発掘調査の概要と文献については吉村 2011 にまとめられている。以降の調査は、第 14 次(吉村、近藤、長谷川他 2011)、第 15 次(吉村、近藤、矢澤他 2011)、第 16・17 次(吉村他 2012)、第 18 次(吉村他 2013)、第 19 次(吉村他 2014)、第 22 次(吉村他 2016; Yoshimura et al. 2016a)、第 23 次(Yoshimura et al. 2016b; 吉村他 2017)、第 24 次(Yoshimura et al. 2018b; 吉村他 2018)が実施されている。第 20・21 次は倉庫における遺物整理調査であったため、概要報告はない。中王国時代の埋葬については Baba and Yoshimura 2010, 2011, Baba 2014, Baba and Yazawa 2015, Yoshimura and Baba 2015, 矢澤、吉村 2016, Yazawa 2017, Yoshimura et al. 2018a にまとめられている。
- 2) 第 25 次調査は 2018 年 2 月に実施された。調査隊の構成は次の通りである。隊長:吉村作治、現場主任:矢澤健、考古学班:近藤二郎、山崎世理愛、石崎野々花、有村元春、建築学班:柏木裕之、人類学班:馬場悠男、坂上和弘、広報:岩出まゆみ、事務局:山田綾乃、渉外:吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 3) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している(Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。

- 4) 図5のシャフト151堆積断面図はセクションの観察によって作成されたものではなく、発掘の過程で層の変わり目を記録していった情報を元に復元されたものである。
- 5) 図8.1～14の内、図8.2、8.3、8.10はNile B2であり、それ以外はNile Cである。
- 6) 中王国時代のビール壺の概要については次にまとめられている (Schiestl and Seiler 2012: 640-643)。
- 7) 中王国時代第12王朝における共同統治の有無、センウセレト3世とアメンエムハト3世の共同統治の有無については議論が行われてきたが、近年の調査・分析によって共同統治が行われていた蓋然性が高まっている (Schneider 2006: 170-175)。
- 8) R. シストル (Schiestl) と A. ザイラー (Seiler) の Class3d に相当すると考えられる (Schiestl and Seiler 2012: 660-661)。
- 9) R. シストルと A. ザイラーの Class3d に相当すると考えられる (Schiestl and Seiler 2012: 660-661)。

参考文献

Arnold, Do.

- 1982 “Keramikbearbeitung in Dahschur 1976–1981,” *Mitteilungen der Deutschen Archaeologischen Instituts, Abteilung Kairo* 38, pp.25-65.
- 1988 “Pottery”, in Arnold, Di. (ed.), *The South Cemeteries of Lisht, Vol.I: The Pyramid of Senwosret I*, New York, pp.106-149.

Baba, M

- 2014 “Intact Middle Kingdom Burial of Senu found at Dahshur North”, in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.35-48.

Baba, M. and Yazawa, K.

- 2015 “Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North”, in Grajetzki, W. and Miniaci, G. (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt, Middle Kingdom Studies* 1, London, pp.1-24.

Baba, M. and Yoshimura, S.

- 2010 “Dahshur North: Intact Middle and New Kingdom Coffins”, *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp.9-12.
- 2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, in Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J., (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, vol.1, Prague, pp.158-170.

Bader, B.

- 2009 *Tell el-Dab'a XIX: Avaris und Memphis im Mittleren Reich und in der Hyksoszeit. Vergleichsanalyse der materiellen Kultur*, Wien.

Bietak, M.

- 1984 “Problems of Middle Bronze Age Chronology: New Evidence from Egypt,” *American Journal of Archaeology* 88, No.4, pp.471-485.

Bourriau, J.

- 2010 *The Survey of Memphis IV. Kom Rabia: The New Kingdom Pottery*, London.

Holthoer, R.

- 1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery*, Stockholm.

Hope, C.A.

- 1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood.

Lacau, P.

- 1903-1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire I*, Cairo.

Nordström, H.A. and Bourriau, J.

- 1993 “Ceramic Technology: Clay and Fabrics,” in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.

Rose, P.

- 2016 “9: The Ceramics from Shaft I”, in Strudwick, N (ed.), *The Tomb of Pharaoh's Chancellor Senneferi at Thebes (TT99), Vol. I, The New Kingdom*, Oxford, pp.191-238.

Schiestl, R. and Seiler, A.

- 2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom. Vol.I: The Corpus Volume*, Vienna.

Schneider, T.

- 2006 “The Relative Chronology of the Middle Kingdom and the Hyksos Period (DYNS. 12-17),” in Hornung, E., Krauss R. and Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston, pp.168-196.

Szafranski, Z.E.

- 1998 “Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from tell El-Dab‘a,” *Ägypten und Levante* 7, pp.95-119.

Williams, B.B.

- 1992 *New Kingdom Remains from Cemeteries R, V, S and W at Qustul and Cemetery K at Adindan*, Chicago and Illinois.

Yazawa, K.

- 2017 “The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North”, in Bárta M., Coppens, F. and Krejčí J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2015*, Prague, pp.531-544.

Yoshimura, S. and Baba, M.

- 2015 “Recent Discoveries of intact tombs at Dahshur North: Burial customs of the Middle and New kingdoms”, in Kousoulis P. and Lazaridis N. (eds.), *Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists, University of the Aegean, Rhodes, 22-29 May 2008, Orientalia Lovaniensia Analecta* 241, pp.541-556.

Yoshimura, S., Baba, M., Yazawa, K., Jaeschke, S. and Uda, M.

- 2018a “Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis”, *The Journal of Egyptian Studies* 24, pp.158-177.

Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K., Matsunaga, S. and Yamazaki, S.

- 2016b “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 1, pp.3-22.

Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K. and Yamazaki, S.

- 2016a “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-second Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 1, pp.3-19.

Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Yamazaki, S., Ishizaki, N. and Arimura, M.

- 2018b “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-fourth Season, 2017”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 3, pp.3-38.

柏木裕之

- 2009 「エジプト、ダハシュール北遺跡から発見されたシャフト墓の掘削工程について」、『西アジア考古学』第 10 号、pp.19-32

矢澤 健、吉村作治

- 2016 「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について－遺構の形状・規模・分布の分析－」、『オリエント』第 58 巻 第 2 号、pp.196-210.

吉村作治

- 2011 「Ⅰ. はじめに」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、pp.9-14.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子

- 2011 「Ⅱ. 第 14 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、pp.15-60.

吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子

- 2011 「Ⅲ. 第 15 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、pp.61-83.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、山崎世理愛

- 2016 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告－第 22 次調査－」、『エジプト学研究』第 22 号、pp.91-112.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、松永修平、山崎世理愛

- 2017 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告－第 23 次調査－」、『エジプト学研究』第 23 号、pp.3-25.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、山崎世理愛、石崎野々花、有村元春

- 2018 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告－第 24 次調査－」、『エジプト学研究』第 24 号、pp.113-157.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子

2012「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第16次・第17次発掘調査―」、『エジプト学研究』第18号、pp.21-67.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、西本真一

2013「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第18次発掘調査―」、『エジプト学研究』第19号、pp.15-43.

2014「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告―第19次発掘調査―」、『エジプト学研究』第20号、pp.15-43.

早稲田大学エジプト学研究所 編

2003『ダハシュール北〔I〕―宇宙考古学からの出発―』、Akht Press.

エジプト学研究 第25号

2019年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 近藤二郎

The Journal of Egyptian Studies No.25

Published date: 31 March 2019

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist